

すまいるん

季刊
2000
春号

(通巻第54号) 二〇〇〇年四月一日発行 ©



札幌所を西端に、住棟と厨房が中庭を囲むインドネシア・マドワラ族の住居。家族が増えると東の方向へリニアに増築、連結されてゆく——《風紋》より。

特集Ⅱ再検証—地域からのまちづくり

目次

《風紋》鞍型屋根の連結住居のインドネシア 藤井 明……2

《焦点》地域からのまちづくり HOPE計画が起した 大きな波 三井所清典……4

《HOPE計画》を検証する……7

林寛治(建築家) 十岩田司(建設省 建築研究所) 司会Ⅱ片山和俊(東京芸大 助教授)

伝建地区今井町の試み—町家再生のモデルとして 有村桂子……26

ふるさと大野のまちづくり—今昔知恵は住人におろく 松井郁夫……30

古河のまちづくり—町に誇りを持って定住する 吉田桂一……36

住文化の地方性といふこと—地域との住文化が育つとすればそれは 戸部栄一……40

《すまいる》のテクノロジ—文化財からみたまちづくりの現在 益田兼房……44

《私のすまいる》長屋ものがたり 西川祐子……49

98年度助成研究の要旨……58

《図書室だより》西洋の住宅を考える 五十嵐太郎……63

《すまいる再発見》ストーリー、テラスハウス、パーク、ティー 福井裕司……70

ひろば……56 住総研エディター……66 編集後記……72

ふるさと大野のまちづくり今昔

知恵は住人にあり。ワークショップで元気な住民参加

松井 郁夫

はじめに

最近地方を旅すると、古い町並みに閑散とした人気のない商店街の風景に出会うことが多い。どの町も、かつての賑わいが失われて久しく見えるが、一体いつの頃から地方の町が、こんなに殺伐としてきたのであろう。

私のふるさと、福井県大野市もその例外ではない。明治時代から、越前羽二重と呼ばれる絹織物が盛んで、あちこちの家々から織機の音が響く活気のある町であったのに、近頃は、すっかりさびれ、町を行交う人も少なくなっ

てしまった。振り返れば、昭和三〇年代頃が、大野の町が一番かがやいていた頃だったのではないだろうか。その頃までは、昔ながらの町並みに、風情ある年中行事や人情の残る、織物の町であったと記憶している。

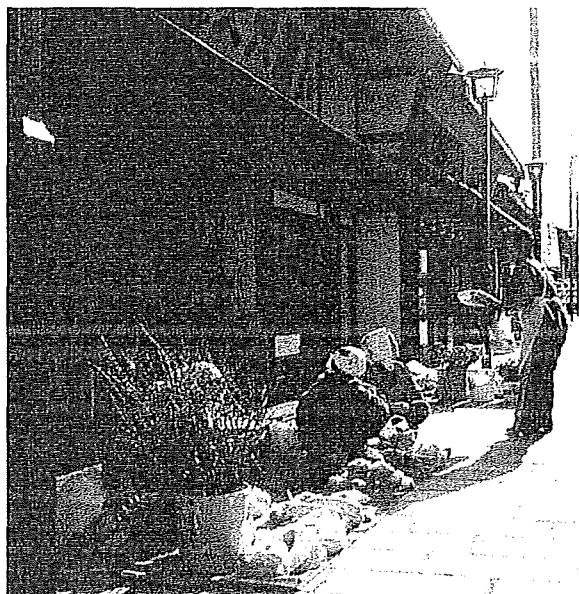
変貌する歴史の町並み

大野は、北陸の小京都と呼ばれる碁盤の目の町割が美しい城下町(図一)である。街路は、南北に一番(本町)通りから五番通りまで、東西に大鋸町通りから石燈籠通りまでに町人街をつくり、周囲を寺院の建物で防御し、高い亀山の上に天守閣を置いて、山のまわりに武家屋敷地を配していた。町

割街区の背後には、下水路にあたる背割水路を備えていた。

町の建物は、明治の大火で、ほとんどが焼けたため、現在の建物は、明治三二年以来の建設である。約一〇〇年を生き続けた町家は、豪雪地帯にもかかわらず軒の深い登り梁構造に「せがいづくり」となっている。(写真一、図一) 陰影の深い町家が、碁盤の目の街路に軒を連ね、東に寺院の大屋根、西に天守閣が見えるのが大野の原風景であった。

しかしながら、昭和四〇年代からの高度成長の波は、大野の町を呑み込んで、町中に街路拡幅計画を促進し、周囲にバイパス道路を建設した。今になってみれば、経済発展のための車社会に対応するまちづくりということ



写真一 せがいづくりの外観

城下町 大野

生かす町並み
まちづくりマップ

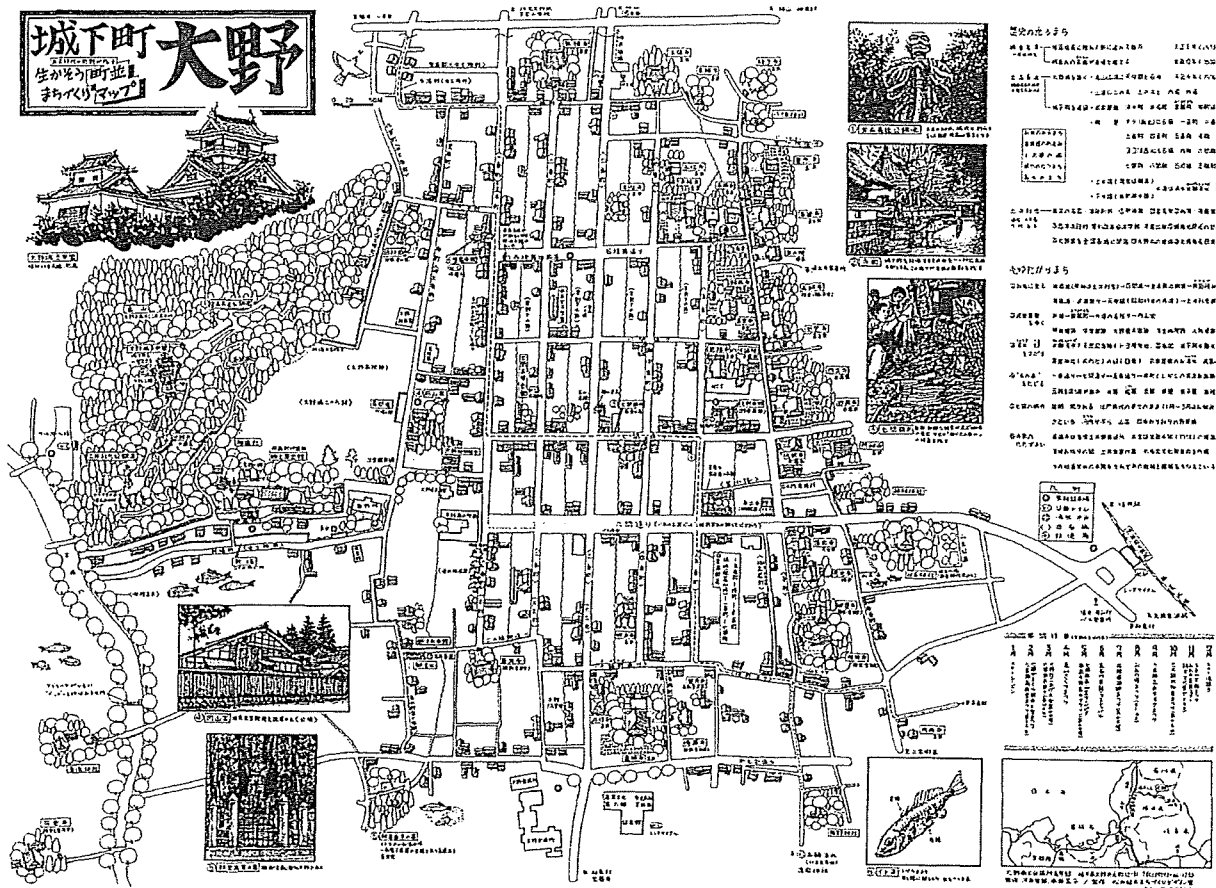


図-1 大野の町並みマップ

であったが、それは経済性という名の町壊しであった。残念ながら、未だに「道路づくり」経済発展」の幻想は消えていない。

大野に限らず、日本全国の町々を変貌させた当時の都市計画とは何だったのだろう。私達は、この時期を振り返り、地域の歴史や気候風土を積み上げることができなかつた計画手法の反省に立って、これからのまちづくりに臨むべきであろう。

HOPE計画の導入

一九八三（昭和五八）年、「HOPE計画」が建設省の事業として施行された時期は、まさに時代を捉えた好機であったと思う。以降一七年、この事業が、日本各地のまちづくりに与えた影響力は大きい。計画の主旨である地域性の見直しは、今やまちづくりの前提条件である。

大野市でも一九八五（昭和六〇）年、「HOPE計画」を策定、続く八六年、八七年、八八年と継続、歴史都市大野にとって大変新鮮な提案がなされた。当時の報告書を開くと、湧き水の広場への提案、背割水路への提案、木造住宅づくりへの提案等々、独創的な提案が多い。さらには、市内の材木店、工務店、設計者を巻き込んだ住宅研究会の設置など、当時としては、先進的な事例も見られ、計画の一部は実施に移された。

しかし、これらの提案や実施は、当時の大野市民にとって、どのように映ったのであろうか。住民参加が必須となっている現在だから言えることかも

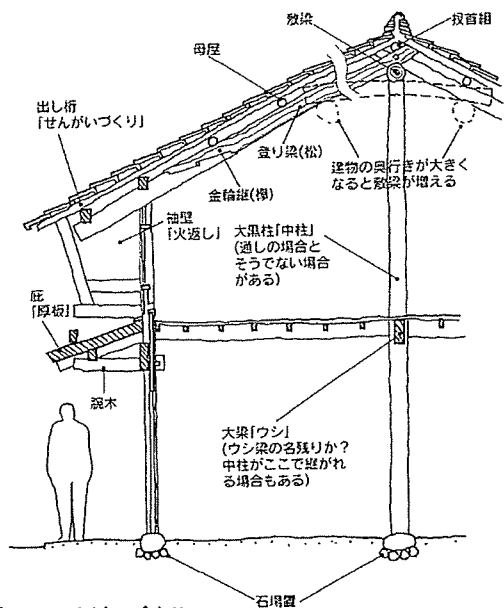


図-2 せんがいつくり



図-3 七間通りの町並み再生イメージ図



写真-2 仕舞屋を観光案内所に再生

しれないが、まちづくり等の計画ごとの難しさは、市民の意見をどれだけ反映できるかにある。いわゆる「住民参加のまちづくり」は、市民のつぶやきが真に実現できるか否かで真価が問われる。

また「協働のまちづくり」では、行政の思いも、専門家の力も、市民の声を実現するための支援手法として使われるべきであり、相互の意見交換の中から実現案が醸し出されることが大切である。従来の都市計画に見られる、専門家主導型の予定調和の世界はなじまない。つまり「協働のまちづくり」では、参加の手法を工夫して、行政、専門家、市民の三者が、相互の意見が積み重ねられるよう、まちづくりのイメージを共有できるプロセスを踏むことに意義がある。

一 設計者としてのかかわり

H O P E 計画の後、大野市の出身ということで、老舗の並ぶ商店街からお声がかかり、商店街づくりのアドバイスを求められたり、集会場のつくり方について相談を受けたりした。それが一九八九年に「七間通り商店街・ハイマート事業」と呼ばれる福井県の補助事業につながった。

七間商店街は、老舗の並ぶ大野ではもともと伝統ある商店街である。信長の昔、約四〇〇年も前から続く朝市が、今も町の食卓を潤している。当初、商店街としては、雪や雨の多い地方でもあって、アーケード街をつくることも視野に入れた商店街づくりの相談であった。

しかしながら、毎回五〇名余の関係者と話し合いを重ねていくうちに、歴史的視点を大切に町を見れば、「大野の生きる道は、町並みの保存再生ではないか」という意見も出始め、みんなで全国各地の先進例を視察に行こうということになった。当時の店主たちの熱意には頭が下がる。事業が開始した一九八九年、四月から十一月の間に一二か所の町並みを視察したのである。近くの町は日帰りし、婦人会の旅行も視察に変えて、西は倉敷、竹原、東は川越、栃木まで自家用車を飛ばして情報を集めた。まさに強行軍であったが、みんな若かった。



写真—3 スーパーが赤い看板を上げていたかつての通り



写真—4 再生された町並み

ワークショップと大野

商店街の事業がきっかけで、大野との関わりが密になった頃、寝耳に水の事件が持ち上がった。市民から亀山と呼ばれて親しまれている、お城の建っている山にトンネルを掘るといふ計画が、時の市長から持ち上がったのである。歴史ある市街地を分断する一大事に町の人びとは驚いた。まさに町を二分する論争に発展した。

もとをたどれば「道路づくりⅡ経済発展」の思想がいまだ抜けきれていない開発思考の閉塞した状況の延長に、トンネル問題が浮上したのである。町の中央部に、かつて防火帯として広げた通りを六間通りというが、昔は、松並木がきれいな公園のような場所であった。しかし自動車社会となって、いつの間にか幅の広い車道となっていたのである。この通りに、福井からの幹線道路をつなぐ話が、トンネル問題の発端である。

トンネル賛成派と反対派のしがらみの消えないそんな時期に、大野青年会議所（J.C）からまちづくりのアドバイスをしてくれないかと持ちかけられた。まさに火の中の栗を拾いに行く心境であったが、「知恵は住民にあり」である。この時を、大野で住民参加のワークショップを実施する好機と考えた。主催は大野青年会議所。会員の中には、トンネル問題に賛成者も反対者も両方いる。そこで、両者入り交じった、いくつかのグループに分かれて、亀山周辺のまちづくりを、模型を使ってシミュレーションしてもらおうプログラムを考えた。みんなが都市計画をするのである。現実味を持たせるために、各グループが考えた案には、事業費の積算と財源の確保まで考えてもらうことにした。これならば、真剣に考えてくれるはずである。

まずは現地を見ることから始めた。現場第一主義もワークショップの原則の一つである。みんなで一緒に現地を見ることによって同じテーブルに付くことができるのである。ただし漫然と現地を見ても、土地を読むことはできない。その土地が、どんな場所なのかを理解してもらおうプログラムが必要である。こんな場合は、ネイチャーゲームが有効である。木々や鳥の声に耳を

そんないきさつの中、大野市の行政支援がまた良かった。「ハイマート事業」の報告に沿い、「ふるさと創生資金」を使って、七間通りの石畳化を実現したのである。さらに、小さな町屋の仕舞屋を再生（写真—2）して、商店街の観光案内所にした。街灯を町の風情に合わせて取り替えたりもした。特筆すべき出来事は、通りの中心地に真っ赤な看板を上げていたスーパーマーケットが、自主的に看板を降ろし（写真—3、4、図—3）瓦屋根を付けたことである。その効果は抜群で、各商店が競い合っただけの家並みを復元し始めた。わずか三年間の間に通りは変わった。その結果、歴史的町並みが、内外の人びとも認められ、多くの客を集めるようになったのである。

私もこの事業に最初から参加したが、毎回の話し合いで驚いたのは、商店主たちのバイタリティーであり、時代を生きる知恵である。老舗の主人が言ったことは「知恵は住民にあり」という一言が、今でも忘れられない。

傾けるのである。さらに、町に出て町の人びとの意見も集める必要がある。「突撃インタビュー」である。ここで集めた意見は有意義である。町の生の声が聞けるのであるから。

これらの意見の中からキーワードを探すべく、参加者の意見を重ね合わせながら、立場を変えたロールプレイングゲームを行なった。たとえば、もしあなたが市長だったら亀山をどうするかとか、観光客だったらどうするかとか、投げ掛けた問いに対して、建設的な言葉を見つけるのである。



写真—5 模型を使って町づくりをシミュレーション

さていよいよ本番は、地図の上にシミュレーションする計画図の作成である。まちづくりの目標と手法を書いたカードを用意して、グループ内の意見を積み上げていく。図上に各手法に合ったアイテムを並べれば、トンネル賛成派の図もできればトンネル反対派の図もできてくる(写真—5)。

発表は各グループで行なう。予算の計上が義務づけられていたのでみんな真剣である。当然トンネル派の予算は多い。どうするかと思えば、ほとんどが補助金を当てにしている。

四案並んだがこの日は結論を出さずに、文化祭の日に成果品をパネル展示して、市民投票をすることとなった。結果は、トンネル賛成派が二四%、トンネル不要派が七六%で、内訳は、トンネルは掘らないが道路を付け替えるが六〇%、トンネルも道路も要らないという人は一六%という結果となった。このワークショップが影響したとは思えないが、市長は交代した。さらに、亀山のトンネル問題は迂回案で決着しそうな様子である。

最近の大野

現市長になって以来、市の事業をお手伝いさせて頂く機会が増えた。中でも旧織物組合の建物の再生は、印象深い仕事であった。建物の買い取りに際して委員会が組織されたが、そのメンバーで「ワークショップ」を実施したのである。

当初、通常の委員会と違う進め方に、各委員の皆さんには戸惑いはあったものの、各委員が進んで利活用案を発表するあたりは、皆さん熱がこもって楽しんでいただけたと思う。まよめの発表の際に、市民代表委員から拍手を受けたのが大変嬉しかった(図—4)。ワークショップは工夫次第でどんな場合にも使えるのだと感じた。その後、文化財登録制度の導入と基本計画まで関わらせていただいたが、実施設計は市内の設計者によってなされた。現在では「平成大野屋本店」として観光客の休憩所として賑わっている。

また、縁あって七間商店街の老舗「やなぎや薬局」(築一〇〇年)も一九九八年に再生することができた(写真—6)。

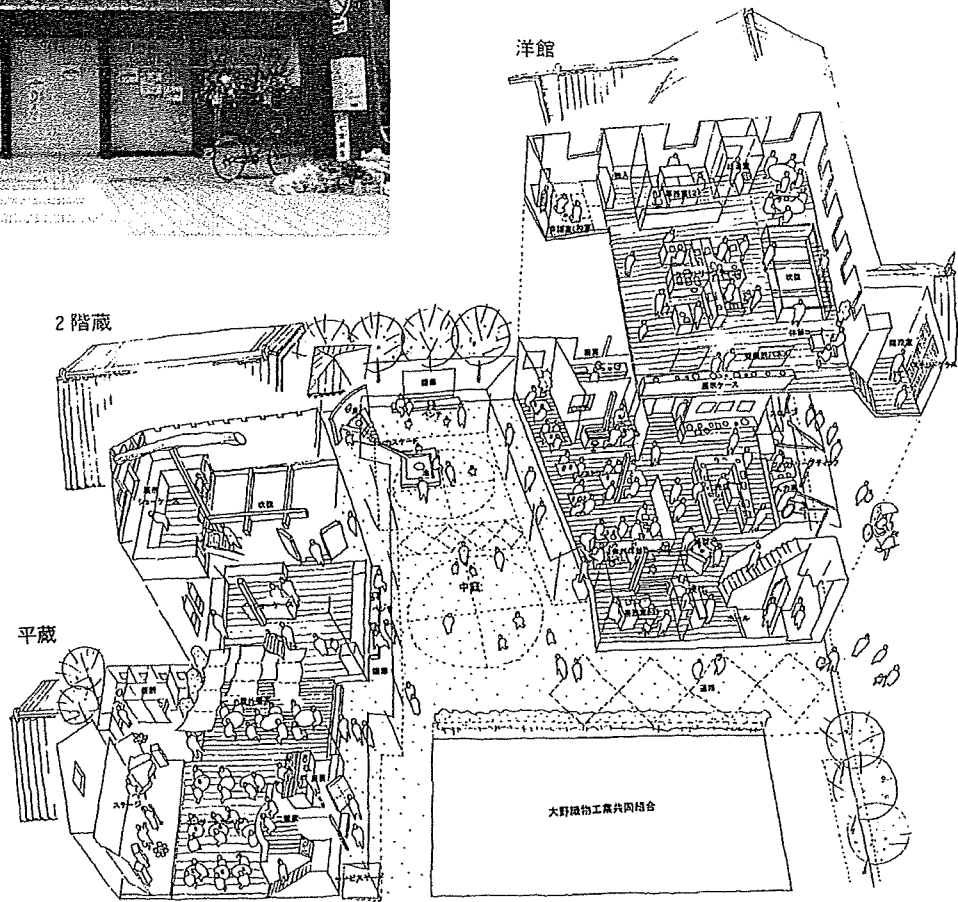
さらに最近の出来事としては、HOPPE全国大会が開催された(一九九九年)。この大会が、大野の町にとっては大変有意義であった。大会当日はワークショップ形式を取り入れ、まち歩きから分科会まで、カードを使って意見を集め、さらにそれを市民である大野JCのメンバーが進行するというユニークな方法を実施したのである。このワークショップによって、全国から集まったまちづくりに関わる行政マンや専門家が、大野の町に多くの意見を置いていって下さったのである。ありがたいことと感謝している。大野市民は、これらの意見を無駄にすることなく、積み重ねていく努力をしなければならない。

おわりに

私は現在、大野市景観条例の策定作業に参加させていただいている。景観は生活の表出という考えのもと、委員の方々と作業を進めている。大野に限



写真一六 老舗の薬局を再生



図一四 ワークショップで考えた旧織物組合の建物の再生計画

らず建物の建て方は、建築基準法さえ守れば自由である。しかしその結果、まちづくりの視点に欠けた多くの建物が、日本全国の町を埋め尽くしている。一体この傾向をどう考えればよいのだろうか。日本の町並みはこのままでよいのだろうか。生活が景観であるならば、これはゆゆしき事態といえる。

ヨーロッパの例を引き合いに出すまでもなく、日本で欠落した町並みの思想を、ふるさと大野で再興できればと望んでいる。長い道程となるであろうが、大野の町がこれからのように変わっても大野らしさを失わない「仕組み」や「ルール」づくりに努力したいと考えている。経済性と都市化に揺れる一地方都市ではあるが、歴史の町としての誇りと理念を持って、まちをつくれたらどんなにか素晴らしいことだろう。

さいわい昨年は、念願の勸日本ナショナルトラストの町並み調査「越前大野の城下町と町屋」（編集…若越建築文化研究所、吉田純一、国京克巳）を実施していただいた。これで地元の人たちが、自分自身の家や町を知る良い機会ができたと思う。事実、調査報告会では、多くの市民が真剣な意見のやりとりを交わしていたことが印象的であった。この波を絶えることのないうねりに繋がられるように、これから市民の皆さんと共に努力したいと思う。

松井郁夫／まつい、いくお
 福井県大野市生まれ。東京芸術大学美術学部卒業、一九七九年、同大学大学院修了。
 現代計画研究所、小川行夫建築設計事務所を経て、一九八五年、松井郁夫建築設計事務所設立、代表取締役。金沢美術工芸大学講師。
 著書に「木造住宅」「私家版」「仕様書」（共著）がある。